

0 2	一宮	北部中学校	コイケ ユウト 名前 古池 勇斗
分科会番号	2 0	分科会名	総合学習

研究題名

主体的に情報を確かめ、判断する力を育てる情報モラル教育

— 複数の情報を比較・検証する学習を通して —

研究要項

1 はじめに

SNS や動画共有サービスの普及により、生徒は日常的に大量の情報に接している。そこには、発信者や根拠が明確でない投稿、短く切り取られた動画、確認が十分でない第一報なども含まれる。さらに生成 AI の発達により、実写と見分けにくい画像や文章を容易に作成できるようになった。情報の受け手には、内容を即座に信じたり否定したりするのではなく、発信元や根拠、他の情報との整合性を確かめながら判断する力が求められている。

本校では、個人情報の保護や SNS 上のトラブル防止などを中心に情報モラル教育を進めてきた。しかし、従来の指導は「危険な情報に気を付ける」という注意喚起に偏りやすく、生徒が実際の情報を前にした際、どのように判断し、判断できない場合に何をすべきかまで十分に扱えていなかった。そこで本研究では、「一つの情報だけで判断しない力」を、①すぐに決めつけない、②複数の情報や根拠を確かめる、③新たな情報に応じて判断を更新する、という姿として捉えた。

2 研究のねらい

(1) 情報モラル教育の必要性

インターネット上の情報は、真実か虚偽かを簡単に二分できるものばかりではない。第一報の段階では事実関係が確定しておらず、続報によって内容が補足・修正されることもある。また、生成 AI による画像は年々精巧になり、画像内部の不自然さだけで見抜く方法には限界がある。したがって、正解を早く当てることよりも、情報が不足していることを認識し、判断を保留し、発信元や複数の情報を確かめる態度を育てる必要がある。

(2) 目指す生徒像

本研究では、「一つの情報だけで判断せず、複数の情報を比較・検証しながら、根拠をもって主体的に判断できる生徒」を目指す。具体的には、情報を見た直後に事実を決めつけないこと、発信元や異なる見方を確認すること、続報が示された場合には判断を修正すること、判断できない情報を安易に共有・拡散しないことを目標とした。

3 研究の仮説

ニュースの第一報と続報、及び AI 生成画像を比較し、判断の根拠を言語化して交流する活動を設定すれば、生徒は「自分の判断も誤り得る」ことに気付き、一つの情報だけで結論を出さず、複数の情報や根拠を基に主体的に判断しようとする態度を高めることができるであろう。

4 生徒の実態

授業前に全校生徒を対象としてアンケートを実施した。AI 画像を見抜く自信について、有効回 488 名のうち「とてもある」29.9%、「少しある」46.3%で、両者を合わせると 76.2%であった。約 4 人に 3 人が、自分には AI 生成物を見抜く力があると捉えていた。（図 1）

一方、3 枚の画像について AI 生成か実写かを判断させたところ、宇宙人の画像は 97.6%が正答したのに対し、東京の風景は 56.1%、戦場の画像は 21.5%にとどまった。非現実的な画像は判断しやすいが、報道写真に近い画像になると、多くの生徒が第一印象に影響されて誤判断していた。（図 2）

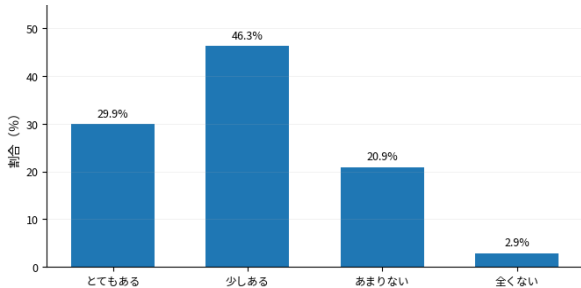


図 1 AI 画像を見抜く自信（対象：488 名）

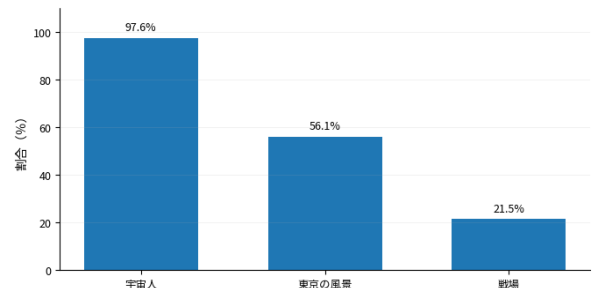


図 2 AI 画像 3 問の正答率（対象：488 名）

以上から、生徒は AI 生成物を見抜く自信をもつ一方、画像によって正答率に大きな差があり、第一印象だけでは安定して判断できない実態があると捉えた。このことから、本研究では、見抜くための知識を増やすだけでなく、自分も誤ることを前提に判断をいったん保留し、続報や他の情報を確かめる態度を育てる学習を構成した。

5 研究の手立て

（1）第一報・続報教材による判断の更新

最初の活動では、有名人のスキャンダルに関する第一報を提示し、その時点での判断と根拠をワークシートに記入させた。その後、第一報とは異なる側面を示す続報、さらに事実関係を補足する続報を順に提示し、各段階で判断が変化したか、どの情報が影響したかを書かせた。

この活動では、判断を変えることを「間違い」と捉えさせないようにした。限られた情報から暫定的に考え、新しい根拠が得られた時点で結論を修正することは、情報社会における適切な判断である。第一報を誤報、続報を正解と単純化するのではなく、報道時点や取り上げる側面によって得られる情報量や印象が異なることを確認した。

（2）AI 生成画像による自己判断の相対化

授業では、まずクマの 2 枚の画像を提示し、どちらが AI 生成画像かを判断させた。見た目だけで判断した根拠を書かせた後、正解とその根拠となる情報を示し、自分の判断が誤る可能性を実感させた。その後、事前アンケートで使用した宇宙人、東京の風景、戦場の画像について全校の判定結果を示した。非現実的な画像は判断しやすい一方、報道写真に近い画像ほど判断が不安定になることを確かめ、「AI 画像には必ず分かりやすい不自然さがある」という思い込みを揺さぶる構成とした。

教師は、AI 画像の真偽を、指や文字など画像内の不自然さだけで判断する方法だけを扱うのではなく、画像そのものの特徴だけで真偽を判断することには限界があることを伝えた。生成技術が向上すれば、画像だけで真偽を見極めることはますます難しくなるためである。その上で、画像検索や発

信元、関連ニュース、撮影時期、場所、前後の文脈などを確認することの必要性を示した。画像を「AI 画像を見抜く教材」ではなく、判断に必要な情報を主体的に確かめる態度を育てる教材として位置付けた。

（３） 根拠を交流する短時間の協議

個人で判断した後、４人程度のグループで約５分間、判断と根拠を交流した。同じ画像でも、「文字が不自然」「場所としてあり得る」「実際のニュースで見たことがある」など着眼点は異なる。他者の説明を一つの情報として取り入れ、個人では見落としていた視点を補わせた。一方、多数意見に合わせる事が主体的判断ではないため、「人数が多い方が正しいとは限らない。最後は根拠を基に自分で判断する」と確認した。

（４） 本時の学習

本時は５０分で実施した。導入では、事前アンケートの結果を基に、AI 画像を見抜く自信と実際の正答率との差を示し、「自分の判断も誤る可能性がある」ことを課題として共有した。続いて、記事①・記事②・記事③を順に提示し、その都度、感じたことや判断の根拠をワークシートに記入させ、新たな情報によって判断がどのように変化したかを振り返らせた。その後、クマの２枚の画像を比較してどちらがAI 生成画像かを判断し、事前アンケートで扱った宇宙人・東京・戦場の画像の判定結果を提示して、見た目だけで判断することの難しさを確認した。最後に、「これから情報とどのように向き合っていきたいか」をグループで交流し、自分の考えをワークシートにまとめた。（写真１～４）



写真１ 記事①～③を基に判断を更新する様子



写真２ AI 画像の判断根拠を考える様子



写真３ AI 画像の判断根拠を交流する様子



写真４ 情報との向き合い方を交流する様子

6 実践の結果と考察

(1) 情報を確かめる行動意図の形成

授業後、「これから情報を見るときに意識したいこと」を複数回答で尋ねたところ、「一つの情報だけで判断しない」92.7%、「複数の情報を集める」77.4%であった。また、「すぐに人へ広めない」61.2%、「分からないときは判断を急がない」60.6%、「根拠を確認する」59.5%となった。生徒は、単に情報を疑うのではなく、複数の情報を集め、根拠を確かめ、判断できない場合には拡散を控えるという具体的な行動を捉えたと考えられる。

一方、「反対の意見や別の見方も調べる」は46.6%、「自分で考えて判断する」は40.1%にとどまった。複数情報を集める必要性は理解されたものの、立場の異なる情報を比較し、情報の質を吟味して最終的な結論を形成する段階には、継続的な指導が必要である。(図3)

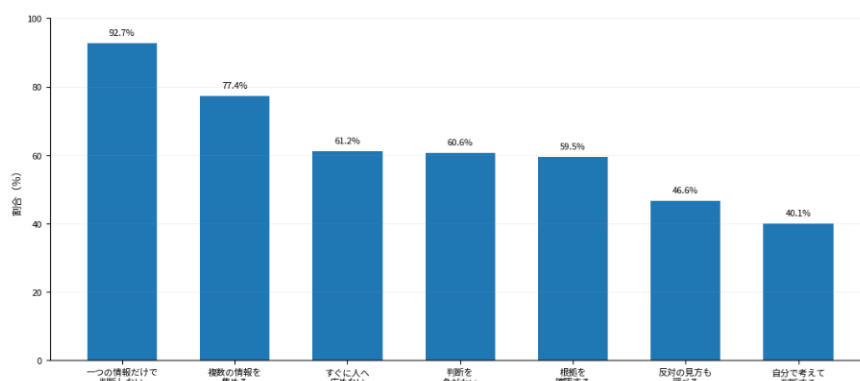


図3 今後、情報を見るときに意識したいこと（複数回答 対象420名）

(2) 判断への過信の修正

事前・事後アンケートを個人IDで照合できた420名を分析対象とした。まず、授業前の回答を個人別に分析し、判断への自信と正答状況の関係を示した。(表1)

分析項目	主な結果	研究上の捉え
見抜く自信	自信あり 76.7%	見抜くことへの自己評価は高い。
3問全正答	55名 (13.1%)	3問を一貫して判断できた生徒は少ない。
高自信層の誤答	105名 (88.2%)	高い自信が判断の正確さを保証していない。

表1 授業前における判断への自信と正答状況（対象420名）

授業前には、見抜くことに自信をもつ生徒が多い一方、3問すべてを正答した生徒は少なく、高い自信をもつ生徒の多くも誤判断していた。このことから、判断の正確さに比べて自信を高く見積もる傾向があったことが分かる。

次に、「AI画像を見抜く自信」という質問項目について、事前・事後アンケート（4件法）の平均値を比較したところ、3.017から2.652へ0.365ポイント低下した。また、個人別に見ると、事前より値が低下した生徒は169名（40.2%）、変化がなかった生徒は210名（50.0%）、上昇した生徒は41名（9.8%）であった（図4・5）。

図4・5から、多くの生徒が自分の判断への自信を見直したことが読み取れる。この低下は、能力や意欲の低下を示すものではない。授業前には、高い自信をもつ生徒の多くが実際には誤判断してい

た。したがって、平均値の低下は、「見た目だけで容易に判別できる」という過信が修正され、自分の判断の不確実性をより慎重に捉えるようになった変化と解釈できる。情報モラル教育では、自信を高めることだけでなく、判断できない状況を認め、必要な情報を確認しようとする姿勢も重要な成果である。

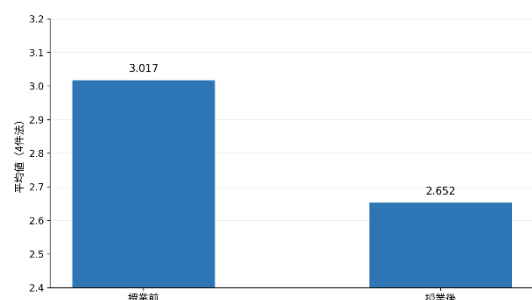


図4 AI 画像・動画を見抜く自信の平均値
(4件法)

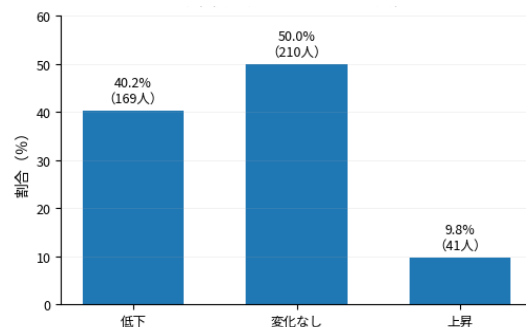


図5 個人別に見た自信の変化 (対象 420 名)

(3) 自由記述に表れた認識の変化

自由記述には、AI 画像の精巧さへの驚きだけでなく、「疑問に思ったら複数の情報を調べたい」「発信元や根拠を確認したい」「分からない情報を友達に伝えないようにしたい」といった記述が多く見られた。生徒のワークシートには、「どっちが正解なの?」「何も信じられない」と、記事が増えるにつれて判断が揺れ動く様子が表れていた。また、「すぐ信じないで、何回も調べたり、その情報は正しいのか改めて考えることが大切」と記述した生徒もあり、情報を主体的に確かめようとする意識の高まりが見られた。(写真5・6) さらに、自由記述の内容を整理すると、生徒の認識は三つの段階に分類することができた。(表2)

【課題④】ニュース記事を読んで

記事①・②・③の3枚を見て、それぞれについてあなたが思ったことや気づいたことを書きましょう。
(どんな気持ちになったか、情報として信じてよいか、気になることなど)

記事① を見て	記事② を見て	記事③ を見て
へー そうなんだ	どちらが正解なの?	何も信じられない!

▶ 3枚の記事を見た後、全体を通してどう思いましたか?

何も信じられなくなってしまった。
どちらが正解の情報なのかわからないし、全てが創作の可能性が
あるのが怖い!

▶ 今日の授業を受けて、これから情報とどのように向き合っていきたいですか?

今の時代、私たち身近に SNS があり、本物の AI がい、
見分けるのが難しいものがたくさんあるけど、轻信しないで、
何回もしらべたり、その情報は正しいのか、改めて考えることが
大切だと思いました。
それに自分も、友達との SNS でのトラブルはまだないけど、
起らないとはわからないから、SNS の使い方に充分気を付けて
いきたいです。

写真5 記事①～③を比較した記述

写真6 授業後の振り返り記述

認識の段階	代表的な記述	研究上の捉え
判断の限界への気付き	「AI 画像と本物の見分けがつかなかった。」	直感だけでは判断できないと自覚した。
確認行動への転換	「複数の情報を調べるようにしたい。」	複数情報の照合を方法として捉えた。
発信者としての責任	「分からない情報を友達に伝えない。」	受信時の判断が拡散防止へ轉移した。

表2 自由記述から見られた生徒の認識の変化

(4) 研究仮説の検証

第一報・続報教材は、最初の情報だけでは結論を確定できない状況をつくり、新たな情報に応じて判断を更新する経験を生み出した。AI 生成画像教材は、見た目だけで真偽を判断することの限界を実感させ、発信元や関連情報を確認する必要性を明確にした。さらに、判断の根拠を言語化し交流したことで、自分とは異なる着眼点を取り入れながら、判断の過程そのものを振り返ることができた。

事後アンケートの回答、個人別の事前・事後比較、自由記述のいずれからでも、生徒は「自分の判断も誤ることがある」と認識し、一つの情報だけで結論を出さず、複数の情報や根拠を確かめながら判断しようとする姿勢を高めたことがうかがえた。したがって、本研究の仮説はおおむね支持された。ただし、異なる立場の情報を比較することや、根拠を吟味して自分で結論を形成することには課題が残った。

7 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

第一に、事前・事後アンケートを匿名 ID で対応させたことで、全体平均だけでなく、一人一人の変化や高自信層の実態を捉えることができた。大規模な全校実践でも、個人対応分析と自由記述を組み合わせることで、生徒の変容を具体的に検証できた。

第二に、「一つの情報だけで判断しない」「複数の情報を集める」「根拠を確認する」「判断できない情報を広めない」という具体的な行動を、生徒が自分の課題として捉えた。続報教材と AI 画像教材に関連付けたことで、ニュース、SNS、友人からのうわさなど、日常のさまざまな場面へ学びをつなげることができた。

第三に、「AI 画像を見抜く技術」の習得にとどまらず、自分の判断の限界を自覚し、必要に応じて判断を更新する学習へ転換できた。自信の低下を過信の修正として捉えたことで、見抜けたかどうかだけでは測れない生徒の変容を示すことができた。

(2) 今後の課題

第一に、今回確認したのは授業直後の認識と行動意図であり、実際の行動が継続的に変化したことを直接示すものではない。数週間後の追跡調査や、SNS 投稿を想定した場面課題を行い、確認行動、判断保留、拡散防止が持続しているかを検証する必要がある。

第二に、「複数の情報を集める」だけでは、同じ立場の情報ばかりを集める可能性がある。今後は、立場の異なる記事や、信頼できる情報同士が食い違う事例、現時点では結論を出せない事例を扱い、情報の量から質の吟味へ学習を深めたい。また、「分からない」「今は判断しない」という選択を、根拠がそろうまで待つ主体的な判断として価値付ける必要がある。

第三に、本実践を一時間の講座で終わらせず、各教科や日常指導と関連付ける必要がある。社会科の複数資料の比較、国語科の根拠と意図、総合的な学習における調査・発信などと結び付け、情報の受信と発信の両面から系統的に育成していきたい。

8 おわりに

完全に見抜くことが難しい情報社会だからこそ、自分の判断を過信せず、複数の情報や根拠を確かめ、必要に応じて判断を更新する姿勢が重要である。今後も、生徒自身が「どのように確かめ、判断するか」を考え続ける情報モラル教育を進めていきたい。